【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	山　口　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	豊浦町立誠意小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	２	２	２	１	１３	１８
児童数	４２	４７	４５	５１	５２	５２	２	２９１	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「学力向上をめざした算数学習（２年次）」
～数学的な考え方を伸ばす指導の工夫～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

１～６年生全学年の算数
〔選択した理由〕
①　本校は、算数におけるＴ・Ｔ指導及び少人数指導の研究実績がある。
②　算数は他の教科に比べて、理解度に差が生じやすい。
③　算数の授業においては、１・２年はＴ・Ｔ指導を、３～６年は少人数指導を行っている。
以上の３点から、学力向上をめざすために、算数を全学年で取り組むことにした。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度

①　テーマ
学力向上をめざした算数学習（１年次）
②　仮説
一般的な見方として、新学習指導要領での時数削減にともなう学習内容の厳選によって、学力の低下が懸念されている。また、本校の算数の学力検査においては、全国平均よりやや低い結果が出ている。こうした本校の現状を考えたとき、学力向上に関わる具体的な方策を講ずる必要がある。そこで本校では、以下の５点についての手立てを考えていくことにした。
ア　Ｔ・Ｔ指導と少人数指導の推進
イ　習熟度を基にした年間指導計画の見直し
ウ　評価内容・方法の工夫と改善
エ　個別化・個性化を図る学習方法の多様化
オ　学習の基盤づくりの確立
以上、ア～オを全校体制で組織的に継続研究することによって、必ずや学力の向上に結びつくと考える。
③　研究内容、方法
ア　Ｔ・Ｔ指導と少人数指導の推進
１・２年生においては、学級担任と教頭・教務によるＴ・Ｔ指導をおこなう。また、３～６年生においては少人数指導を実施し、各学年２名の担任と少人数指導担当の計３名が指導にあたる。グループについては、２クラスを解体した３つのグループで編成する。このグループは、学力を均等にした集団で形成しており、学期ごとに担当者が変わる。（１グループあたりの人数は、１７～１９人程度）これらのＴ・Ｔ指導や少人数指導により、個別学習を増やしたり、習熟度別学習を設定したりするなど、きめ細やかな指導を行うことができる。
イ　習熟度を基にした年間指導計画の見直し
単元ごとに数値化した総括的評価等を基に、定着度の低い単元に授業時

数を上乗せするなど、子どもの実態に即した年間指導計画の見直しを図る。

ウ　評価内容・方法の工夫と改善

評価の改善については、「授業に生かす」ということを大前提とし、総括的評価より形成的評価に重点を置き、授業と評価の一体化に力を注ぐ。

エ　個別化・個性化を図る学習方法の多様化

上位の児童に対しては、発展的な学習のドリルやパソコン等によって、定着度を高めるための一人学習を進める。下位の児童に対しては、教科書の内容を基本とした繰り返し学習により、補充的な指導を強化する。

オ　学習の基盤づくりの確立

学習の基盤づくり（例：発表・ノート指導・発問・板書指導など）が学力の向上に大きな影響を与えるとの考えから、授業を支えていく内容に関しての研究も行う。

平成15年度

①　テーマ

「学力向上をめざした算数学習（2年次）」

～数学的な考え方を伸ばす指導の工夫～

②　仮説

算数の学力を向上させるためにはどうすればよいか。本校はその点を常に念頭に置き、学力向上フロンティアスクールとして、１年次の研究を進めてきた。本校では、昨年度、副主題を限定せずに研究を進めた。これは、間口を狭めて深く研究していくよりも、算数科における様々な実践を手広く研究していき、より優れた実践研究を数多く模索していこうとの趣旨からである。その趣旨に基づいて実践した結果、ＣＲＴ学力テストや市販（業者）テストの「表現・処理」と「知識・理解」といった本校が考える「学力１」の力はついてきた。しかしながら、残念なことは、どの学年とも、「数学的な考え方」が全国平均を下回っているということである。（平成１４年度研究集録・学力に関わる基礎資料の収集・分析と活用の項参照）

そこで今年度は、「数学的な考え方を伸ばす指導の工夫」の副主題を設定した。これは、１年次の研究で進めた「表現・処理」や「知識・理解」といった本校が考える「学力１」に関わる研究を、継続研究としてより一層深め、児童の学力向上を図ると共に、昨年度、本校児童が最も苦手とした「数学的な考え方」をいかに伸ばしていくかを、算数的活動を通して研究し、さらなる児童の学力向上をめざしていこうとの考えからである。

「数学的な考え方」については、一般的に子どもたちが敬遠しがちなものであり、教師の側も指導法に苦心するところである。しかしながら、算数の学習において新しい問題や課題に直面したとき、自主的に考え自分で判断していくために最も大切な学力は、「数学的な考え方」である。そこで、算数科においては、知識や技能的な面だけでなく、「数学的な考え方」を育てることの必要性を再確認することが大切となってくる。授業の実際から考えるならば、教師主導の授業、例えば、公式や公式に至るまでのプロセスの説明を省き、「この問題はこうすれば解ける」などと一方的に教え込む授業では、本校の考える学力２は十分に育たない。しかし、子どもたちに自分で体験させ・考えさせ、自分で工夫させてみる授業（授業の中で実験や測定や作業などの活動を多く取り入れ、子どもたちに実際にさせてみるなどの授業）の場合、時間がかかり教師の準備も大変であるが、そういった児童主体の授業の中から、「数学的な考え方」についての学力がより一層伸びるのではないかと考えられる。

以上のことから、「学力向上をめざした算数学習（２年次）～数学的な考え方を伸ばす指導の工夫～」の研究主題を設定し、実践的研究を進めることにする。

③　研究内容、方法

１年次の研究内容を継続するとともに、さらに、

ア　低学年（１・２年）におけるＴ・Ｔ指導の内容と指導法

イ　少人数指導や習熟度別学習を進める上での保護者との連携・保護者への啓発活動について

ウ　習熟度別学習におけるコース別学習内容について

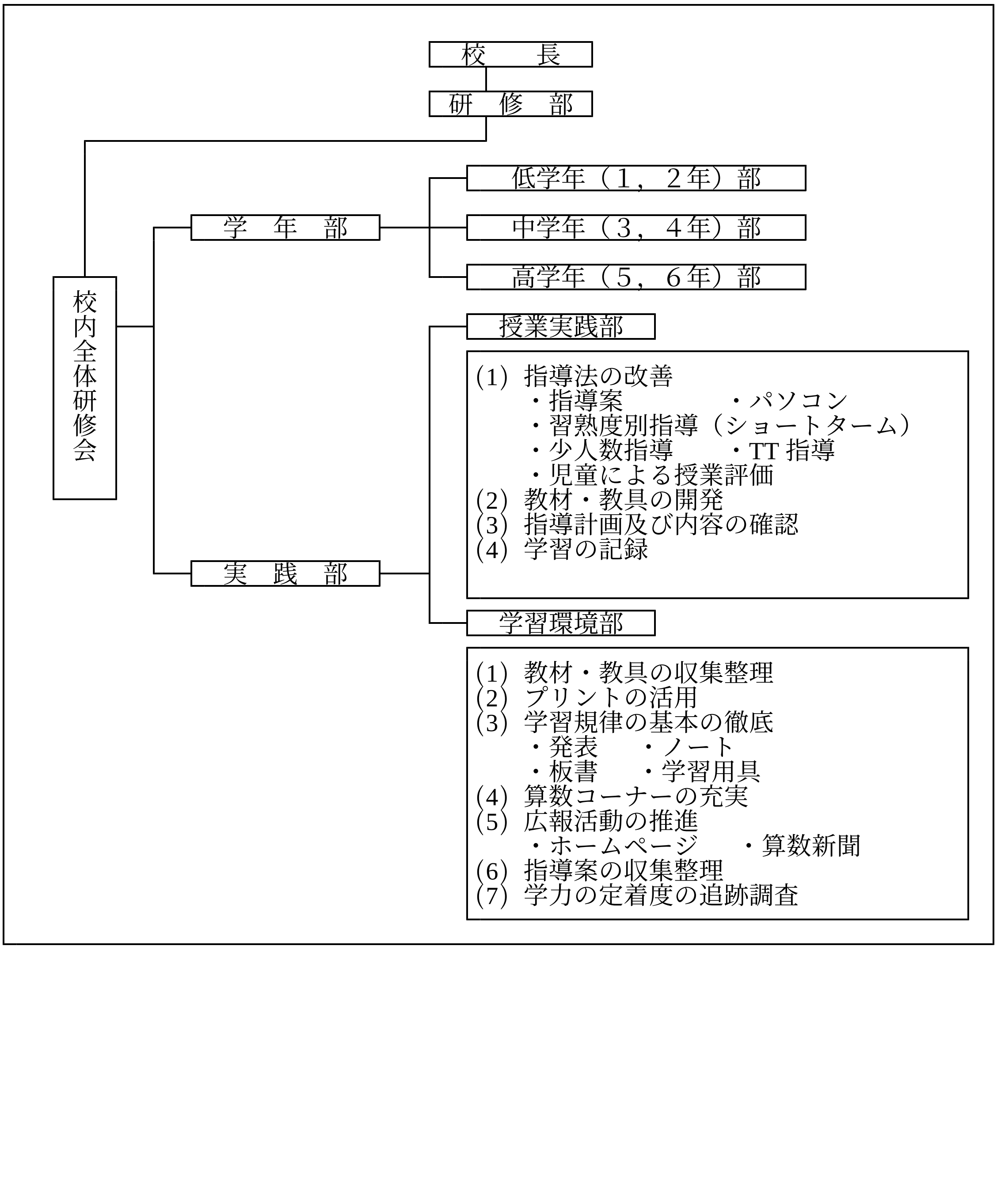
エ　評価規準の見直し

オ　数学的な考え方を伸ばす指導の工夫

※　仮説で述べたとおり、昨年度の研究を踏まえ、「数学的な考え方を伸ばす指導の工夫」の研究を進めるため、昨年度の内容を若干変更した。

平成16年度	①　テーマ 　学力向上をめざした算数学習（３年次） ②　仮説 　１年次・2年次に準ずる。 ③　研究内容、方法 　１・２年次の研究内容を継続するとともに、さらに、 　ア　児童の側から見た授業評価について 　イ　発展的な学習（指導）の内容と手立て 　ウ　学習環境（発表の仕方・ノート指導・板書の方法・掲示物など）について 　エ　ショートタームテストの適切なコースの選択（児童自らの自己選択をめざして）の工夫 　オ　授業に生きる学習評価・客観性や信頼性のある学習評価の工夫 　について研究を進める。

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

１．観点別テストから

学年	年度	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
４年	平成１４年度	74	86	84
	平成１５年度	78	90	86
	比較	+4	+4	+2
５年	平成１４年度	76	84	90
	平成１５年度	72	82	90
	比較	-4	-2	±０
６年	平成１４年度	72	92	90
	平成１５年度	80	92	90
	比較	+8	±０	±０

・　数値の単位は点（１００点満点）

・　比較の欄は、平成１４年度と平成１５年度の２学期のテストの比較を±で表したもの

少人数指導が始まって２年目にあたる４年生以上の記録を表に示した。５年生においてマイナスポイントがあるものの、総じてどの学年も、点数が上がっていることが分かる。本年度は、「数学的な考え方を伸ばす指導の工夫」のテーマを掲げ研究を行ってきたが、「数学的な考え方」の観点において、４年生で４ポイント、６年生においては８ポイントほど点数が伸びていることが、大きな成果といえる。

２．児童による授業評価アンケートの結果から

【問い】先生の教え方はわかりやすいですか。

（１）　とてもわかりやすい　　２４人（４６％）
（２）　まあまあわかりやすい　２６人（５０％）
（３）　すこしわかりにくい　　　２人（　４％）　<６年生52名に行った
（４）　わかりにくい　　　　　　０人　　　　　　アンケート結果より>

このアンケートは、６年生の１学年に行ったものの一部であるが、９６％の児童が、「先生の教え方は分かりやすい。」と答えている。本年度は昨年度の反省から

①　学年部の実践に重きを置いたこと
②　少人数指導において教師間の連携が十分に図られ、教材研究が一段と進んだこと

がその原因と考えられる。学力を向上させていくには様々な要因が考えられるが、教師の指導性（授業での学習の分かりやすさ）という観点からみたとき、本年度の研究は大きな成果があったと考えられる。

２．今後の課題

１　評価について

授業（学習）における評価が重要であることはいうまでもない。本校では指導と評価の一体化をもとに授業をとらえていくことが大切であると考えている。そこで、

（１）　評価規準の見直しと評価方法の研究について
（２）　評価規準を活用していく授業のあり方について
（３）　評価内容・方法の工夫と改善
（４）　授業に生きる学習評価・客観性や信頼性のある学習評価の工夫

の４点が課題として考えられる。

２　習熟度別指導や少人数指導について

本校では、４年生以上の算数の授業は「少人数指導」で行い、なおかつ「習熟度別指導」を多く取り入れている。そこで、

（１）　発展的な学習の取り扱いと教材開発について
（２）　習熟度別学習におけるコース別学習内容について
（３）　コース別学習の内容と効果的な指導について
（４）　ショートタームテストによる適切なコース選択の工夫（児童自らの自

　　己選択をめざして）
（５）　児童の自己評価能力の育成
の５点が課題として考えられる。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

１．ショートタームテスト
　単元の中間または終わりにショートタームテスト（単元の習熟度をみるためのテスト）を実施している。

２．観点別テスト
　単元が終わるごと（原則として）に、観点別に理解度を問うテストを実施し、学習したことがきちんと理解できているかを確認している。

３．学力テスト
　年度末（２月）に観点別到達度学力検査（ＣＲＴ）を実施し、学力の定着度をみている。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．研究会（説明会）の実施
　日　時　　平成16年1月２８日（水）
　場　所　　豊浦町立室津小学校
　研究会名　平成１５年度学力向上フロンティア事業下関地区協議会

２．ホームページの作成
　以前からあった学校のホームページに「学力向上フロンティア事業」の項を追加し、今年度より本校の研究の取組の一部を公開している。

３．研究物の作成
　本年度の研究のまとめとして、５０ページ程度の冊子を作成し、諸学校等に配布する。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☐１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校
【学校規模】　☐６学級以下　☐７～１２学級　☑１３～１８学級　☐１９～２４学級　☐２５学級以上
【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導　☐一部教科担任制　☐その他
【研究教科】　☐国語　☐社会　☑算数　☐理科　☐生活　☐音楽　☐図画工作　☐家庭　☐体育　☐その他
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　☐無